Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-10

「雑種文化」と「土着世界観」をめぐる問い一戦後知識人・加藤周一の射程一

劉, 争

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2020-03-25
(Date of Publication)
2021-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7629号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007629

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論 文 題 目　　（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

「雑種文化」と「土着世界観」をめぐる問い

——戦後知識人・加藤周一の射程——

氏　　名　：　劉　争

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名　（主）　茶谷　直人　教授

（副）　緒形　康　教授

（副）　中　真生　准教授

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

論文要旨

本論文の目的は、加藤周一の思想の特徴を見出し、日本の思想と文化の独自性をめぐる加藤思想の現代的意義を明らかにすることにある。加藤周一は様々な分野において業績を残した知識人であるが、同時代の丸山眞男と比べた場合、研究はあまり多く為されていない。加藤周一の「雑種文化」論と「土着世界観」に含意される思想の意義が明確に見出されたことはほとんどない。今までは体系的ではないと考えられてきた加藤の思想が、雑種文化をめぐる「土着世界観」の思想構図は現在においても有意義なものを為すと考えている。

「近代」と「伝統」をめぐる矛盾が進み、特殊な分野における個別的な現象をめぐる言説が多く、通時的に日本全体を捉えようとする体系、現在の立ち位置を目測できるような思想の座標軸が欠如している。科学技術の進歩、経済発展を志向する現代日本は、政治的には外交関係の複雑化と経済的には進展するグローバル化の下で、インバウンド強化で急激に増加している外国人旅行者への対応、労働力不足で増加傾向の外国人労働者やその家族の受け入れなど外来の多様な文化・アイデンティティを社会的に受け入れざるを得ない状況は嘗てないほどであると言える。日本社会は、取り巻く環境が急速に変化していく一方で、「近代」⇔「伝統」、「特殊」⇔「普遍」、「個別」⇔「全体」のような分裂を未だ克服することができていないと感じられる。しかしながら、近年では改めて戦後の問い、近代の問いを問題化し、乗り越えようとする知的潮流が現れ始めている。

本論文は①加藤周一の主要な著作である『日本文学史序説』から、「雑種文化」論、「土着世界観」、これらを土台に加藤が描き出す日本思想体系の通時性と体系の成立という三つの点について加藤思想の具体的な内容とそれが示唆する意義を見出した。また、②同世代の知識人である加藤周一と丸山眞男の比較、丸山眞男と竹内好の比較、を考察した上で、加藤周一の思想における日本文化の「特殊（個別）⇔普遍（全体）」の構図を見出した。本論文は五つの章に分けた。

序章は、加藤周一は一九一〇年代生れの世代の中で「雑種文化」論を以て日本人の「主体性」を訴えた知識人であるが、思想史の外から思想史を眺めた評論家であるため思想史「部外者」として日本の思想史に拒否されてきたが、加藤周一の射程は常に日本思想史の中にあったと提起した。

第二章は、加藤周一思想の位置づけ、および戦後社会に共有されていた普遍主義的視座の背景における同時代の竹内好、丸山眞男の思想との関連性を提起した。

第三章は先に述べた①について考察したものである。まず「雑種文化」論は、加藤が一九五五年から一九六〇年まで一連の日本文化論を発表し、その中心となったものである。特に論文「日本文化の雑種性」、「雑種的日本文化の希望」は日本文化の具体的な考察である。「雑種文化」という表現は西洋の「純化文化」と対照的に使ったマイナスな意味合いのある言葉であるが、加藤は「雑種文化」に肯定的な意味合いを持たせている。軍国主義が滅び、言論の自由を回復した社会における日本人の在り方を問いたい加藤は、自分自身を日本人の「例」にとるために自伝『羊の歌』と『続　羊の歌』を書いた。筆者は自伝を部分引用したテキスト分析を行い、「独立心」の形成を明らかにし、「現代日本人の平均に近い」人間の決して平均でない力強い一「個性の形成」が具象化した到達点であると見る。加藤が自身の主体性の形成を自伝に託し、多くの日本人の主体性を喚起したいと願ったものであると筆者は結論付ける。さらにこの時の加藤の「独立心」は後の『日本文学史序説』に託した思想体系の構築の主体へと発展し、「土着世界観」の成立との関連性を示唆した。

『日本文学史序説』において提起された「土着世界観」について加藤は『日本文学史序説』の中で個

別の事例を以て抽象的な「軸」を解釈する方法を用いた。その「軸」は「土着世界観」であると同時に、「例外」と「系列」で説明される。加藤が知識人の理想像を個別に描き、それらの共通点を「系列」と「例外」で表現する通時的な方法で概念を具象化する。筆者が「例外」の用例を原作から抽出したのは加藤研究史上初の試みであろうと思われる。加えて、加藤が知識人の理想像の「原点」と見なした山上憶良の世界観を追究し、徹底したテキスト分析を行った。このような作業を通して、「土着世界観」の概念を明確化した。日本が土着世界観で体系としての外来思想を受け入れた際に、三つの特徴の現世主義、現在主義と集団主義によって体系を解体し、局部を注視する傾向があったことから、大局を把握する視座を欠き、思想性および政治性の希薄に繋がったという加藤の批判としても読み取れる。また、加藤周一は「現世主義」「現在主義」「集団主義」を特徴とする土着世界観を思想軸の基底として描くと同時に、「例外」と「系列」の文脈を構築した。筆者は「例外」と「系列」が二義性を持つことから「例外的な自我」と「土着的な世界観」の相関関係の可能性を見出した。

第四章は先に述べた②について考察したものである。②竹内好は、一九五九年に論文「近代の超克」を発表したことで知られ、アジア主義の問題を問い続けてきた同世代の知識人である。当時の中国は時代に取り残された存在であり、日本の多くの知識人が西洋に叡智を求めたのに対して、竹内は自分自身の中国体験と中国の経験を日本の経験に類比し、日本の真なる「近代の超克」に固執した。そのため、竹内好は西洋の近代に対して「否定」的な態度を執った。竹内は魯迅に「否定的媒介者」の役割を持たせ、「否定」のために犠牲の対価を払った人物として評価する。竹内は魯迅を近代の原点とし、近代日本にも同じような「否定」精神を取り入れた「自我」を構築した。筆者は竹内好思想の「抵抗」と「否定」に注目し、その主体性は「特殊」なアジア主義へ執着する「方法としてのアジア」に象徴されており、加藤周一の通時的に網羅する視野と対照的であることを明らかにした。

丸山眞男は、戦後に日本人の社会および精神構造を分析した「超国家主義」を発表したことで注目される戦後民主主義の思想リーダーである。加藤周一とは互いに補助線のような仲間だとみなされてきた。筆者は丸山と加藤の相違点を明らかにし、加藤周一思想の独自性を示した。丸山が一九五二年に出版した『日本政治思想史研究』を形成した戦中に書かれた三本の論文のうち、二本が徂徠論である。筆者は丸山が引用した徂徠の『弁道』を再検討した。引用の分析からわかるように「先王」という単一の聖人のみを立て、本来宋学における普遍的な概念としての「道」を「普遍」から「特殊」へと限定させるものである。このような徂徠について、「原理の普遍性」の中に「歴史的時代の特殊性」を「還元しようとするものではない」と加藤周一は指摘する一方、富永仲基の「加上」説の独創性を高く評価し、その思想の普遍性を評価した。また丸山が提起した日本思想の「原型」、「古層」論に関連して、「今＝ここ」について空間的な意味合いの概念としたが、加藤は時間的な意味合いで解釈した。また加藤は丸山の「非体系的」な特徴を指摘し、自分と丸山の差別化を図ったと考えられる。筆者は両者の思想を区別した認知の可能性を示した。

終章は、以上の内容の考察から明らかにしたことをまとめた。加藤は「個別」と「体系」、或いは「主体性」と「全体」における「普遍性」を総合的に結びつける必要性を感じ、それを未来に強く期待する問題意識が『日本文学序説』に発展し、日本文化の「特殊（個別）⇔普遍（全体）」の体系を構築したのである。加藤は間接的に竹内の「アジア」の「特殊性」の問題を引き継ぎ、竹内好の「個別」と「特殊」の思想に由来する「否定」の精神を、受動的な主体性を発揮する日本の「土着性」に帰結し、丸山眞男の「主体」と「普遍」の思想を歴史の時代や風潮に屈しない「例外」と「孤高」の精神に解釈し、日本

文化の「特殊（個別）⇔普遍（全体）」の通時的な体系の構図を構築したのである。その構図は双方向に往復可能な関係を持ち、互換性を保持することを示すが、解釈し難い問題が多く、明確な定義も欠けている。

戦後知識人の思想の一部を点検する作業に該当する本論文は、加藤周一の「雑種文化」論と「土着世界観」の含意と両者の関係性を明らかにした。「雑種文化」と「土着世界観」、「個別」と「全体」、「特殊」と「普遍」、「例外な思想」と「主流思想」の相関関係を体現する通時的な加藤周一思想の構図を明らかにした。加藤思想の構図と視野は戦後知識人の思想を再点検し、全体的な視野と個別の事象の間でバランス的に結びついた加藤周一の思想には新たな意味を現代の我々に付与するものであり、思想史の外側の評論家として知られる加藤周一の思想は改めて思想史の中に戻し入れられるべきであり、戦後思想史の一部として再認識していくべきであると提言する。

加藤周一および同世代の戦後知識人の間に取り上げられた「伝統」と「近代」の課題、日本文化における「特殊（個別）⇔普遍（全体）」の体系と構図は、日本に限定することなく東アジアおよび世界各地域における「伝統」と「近代」の問題に突きつけられた課題であり、現代社会に示唆的な意義を与えると筆者は考える。それは今後の課題だが、本論文の内容はその出発点をなすものである。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論文審査の結果の要旨

氏　　名	劉 争
論 文 題 目	「雑種文化」と「土着世界観」をめぐる問い —戦後知識人・加藤周一の射程—

要　　旨

本論文は、戦後日本の代表的知識人の一人である加藤周一の思想の現代的意義を、とりわけ、『雑種文化—日本の小さな希望』（1956）において提示された「雑種文化」論と、その発展として『日本文学史序説』（1975）において展開された「土着的世界観」論を中心にして明らかにすることを目的としている。

論文の全体的構成は、次の通りである。まず序章において、主題と執筆の背景、先行研究および研究方法の特徴・意義がクレオール文化論などとの関連で示される。第二章は、1910 年代生れの戦後知識人たちにとって、近代日本と戦争をめぐる問いが如何なるものであったか、「東アジアと近代」の観点から概観する。とりわけ、竹内好と加藤周一、および両者と長年の親交があった丸山眞男に照準を合わせ、戦後知識人共通の問題意識を明らかにする。

フランス留学から帰国してまもなく書かれた『雑種文化——日本の小さな希望』は、国粋主義的日本文化論と西欧文化崇拝両者に対する批判となっているが、本稿は、自伝的著作である『羊の歌——わが回想』（1968）も同じ問題意識から書かれている、つまり、『羊の歌』において、やや自己韜晦的に「平均的」なものとして描き出される加藤自らの半生の軌跡こそ、雑種文化の所産として捉えられていると指摘する。本論文では示唆に留まってはいるが、さらなる考察に値する視点であろう。

第三章は、『雑種文化』の問題意識を引き継ぎつつも、日本の文化・思想に通底する（と加藤が考える）「土着的世界観」のありようを探求した『日本文学史序説』の方法と中心的テーゼを考察する。加藤によれば、儒教・仏教・キリスト教・マルクス主義などの外来思想は、日本での受容プロセスを通じて類似した変容（体系性・超越性・批判性の希薄化など）を蒙ってきているが、それは、現世主義、現在主義、集団主義などを特徴とする「土着世界観」のなせるところである。

しかしながら、他方で加藤は、こうした「土着世界観」の枠に収まらない「例外」として、数多くのテキストを挙げている。本稿は、加藤が「孤立した傑作の系列」とみなす一群の「例外」的テキストや文学者・思想家たちを、その理由とともにリストアップすることによって、土着的世界観と例外的個人とのあいだの緊張をはらんだ両義的関係を際立たせており、この点が、本稿の最も興味深い特長・貢献となっている。リストアップされている「例外」は、山上憶良（中国の思想文学に基づく抒情詩の拡大）、円仁（即物的な叙述態度）、空海（仏教の「日本化」の拒否）、和泉式部（瑣末主義を超えた、歌を通じての自己実現）、日蓮（法の立場からの国家批判）、道元・盤珪（日本語による表現と超越性の融合）、小林一茶（農家の日常を主題化）、富永仲基（思想展開の内在的論理としての「加上」説）、内村鑑三（天皇神格化の否定）などである。

さらに本稿は、こうした「例外」的知識人たちの範型とされている山上憶良の漢文テキスト『沈痾自哀文』の具体的分析を通じて、大陸文学や仏教への理解を背景として独自の「日本的なもの」を表現した憶良の世界観の特長を描き出すとともに、「憶良型知識人」たちの「例外」的な思想的営為は、日本の思想・文化においては「普通」でもあったのであり、「普遍」に通ずるものとして位置づけられていると指摘する。

第四章は、加藤の思想の特徴を、密接な関係にあった竹内好や丸山眞男の思想との対比において、問題意識の交錯・方向性の違いの観点から際立たせる。竹内がこだわった「アジアの特殊性」の問題意識を共有する加藤において、受動的主体性として表れる日本の「土着性」には、竹内の「否定」精神につながる側面があり、一方、丸山が希求した「主体性」と「普遍性」は、加藤においては、普遍に通ずる「例外」と「孤高」の強調として主題化されていると論じられる。

終章は、加藤の「雑種文化」論と「土着世界観」をめぐる思索、とりわけ、「普遍的な例外」をめぐる問いかけは、現代日本のみならず中国を含む東アジアにとっても、伝統と近代の関係を再考するにあたって大きな意義のあること、その意味において、単なる評論家として捉えられがちな加藤周一の軌跡と思想は、改めて日本の戦後思想史の中に戻し入れ、戦後思想史の一部として再考されるべきであると提言する。

本稿は、論述がやや図式的なところなども見受けられるが、戦後日本を代表する知識人の一人である加藤周一の思想の特長と意義を浮かび上がらせるにあたり、同時代の丸山真男や竹内好などの近代化論・日本思想文化論や現代の「クレオール文化論」などとも関連づけて考察していること、加藤の主著である『日本文学史序説』において「例外」とされたテキストや思想家・文学者たちをまとめて整理し、その意義を際立たせている点など、大いに評価されるとともに、今後のさらなる展開が期待される。以上の点から、本審査委員会は、論文提出者・劉争が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

主査記載氏名・印	茶谷 直人

審査委員

区　分	職　名	氏　　名	区　分	職　名	氏　　名
主　査	教授	茶谷 直人	副　査	准教授	中 真生
副　査	教授	緒形 康	副　査	大連理工大学客員教授	嘉指 信雄
副　査	教授	樋口 大祐			